



Title	福祉哲学とは何か : 「超越論的次元を踏まえた社会福祉学の構想」の序論として
Author(s)	中村, 剛
Citation	メタフュシカ. 2011, 42, p. 123-134
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23317
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

福祉哲学とは何か

—「超越論的次元を踏まえた社会福祉学の構想」の序論として—

中村 剛

I. はじめに

少子高齢社会、不安定な雇用、家族や地域における扶養機能の低下。このような社会状況のなか、年間3万人以上の自死者、子どもまで含まれる貧困、児童・高齢者・障害者への虐待といった緊急度の高い問題が山積しており、社会福祉という営みの重要性が増している。にもかかわらず、社会福祉についての学知である社会福祉学は未だ確立されていない。結果、経済・政治・財政といった外的要因にそのあり方が左右され、応益負担を導入した障害者自立支援法¹に見られるように、これを社会福祉と言っていいのか、といった様相を呈している制度も見られるようになってきている。

いま必要なことは、社会福祉とはこういうものであり、そう言える根拠はこうである、と主張することができる社会福祉学を構築することである。そして、その社会福祉学を根拠に、外的要因に左右されない社会福祉を維持発展させていくことである。そのためには、社会福祉とは何であるのかを、その根底から問い考える福祉哲学が必要ではないか。これが本稿の問題意識である。

福祉哲学という営み（思考）は、社会福祉の領域においてすでに行われている。しかしながら、それが「福祉哲学」という形で社会福祉関係者において承認されている訳ではない。そのため本稿では、先行研究（福祉哲学という思考）を整理することで、福祉哲学とは何であるのかを明示することを目的とする。

なお本稿は、「超越論的次元を踏まえた社会福祉学の構想」という研究計画の序論に位置するものであり、この計画を遂行するための方法を示すものである。

II. 福祉と哲学

本稿では「社会福祉という営みの中で、あるいは、社会福祉という営みに対して行われる哲学」

¹ 2011年12月に改正障害者自立支援法が成立し、利用者の自己負担は原則「応能負担」となった。ただし、改正障害者自立支援法も多くの課題を抱えている。

を福祉哲学と捉える。このような意味における福祉哲学の内容を明らかにするために、まず、福祉と哲学の意味を確認することから始める。

1. 福祉とは

福祉には「心地よい暮らし」といった意味がある。しかし、福祉哲学における福祉は社会福祉を意味する。社会福祉という言葉に統一された定義はないが²、その営みには1つの本質的な特徴がある。それは、“最後の一人”の福祉の実現を目指すことである。

「みんなの幸せ」という言葉を耳にする。しかし、その場合の多くは大多数の人の幸せを意味し、いつの時代・社会にもそこに入らない人びと、そこから排除されている人びとがいる。その人たちを取り込もうとする動き（インクルージョン＝包摂）があっても、それでもなおそこに入らず、あるいは排除されてしまう人びとがいる。社会福祉の本質的な特徴は、排除されている“最後の一人”の福祉（幸せを感じられる諸条件）の実現を目指すという点にある。

いつの時代・社会にも、周囲から気づかれずに困難な生活・人間らしい生活ができずに苦しんでいる人たちが存在している。そのことを踏まえつつ、可能な限りそれらの人びとに気づき、必要な支援をするのが社会福祉である。

2. 哲学とは

哲学はギリシアで生まれた。そのため、「哲学とは何か」という問いの答えは、古代ギリシアに遡れば得られると思われるかもしれない。しかしながら納富がいうように「古代ギリシアこそ、『哲学とは何か』をめぐる対立と論争のアリーナ」³であり、一義的に「哲学とは～である」ということはできない。ただし、おおよその意味を示すことは可能である。以下では、視点、対象、目的、方法の観点から哲学の概略を示す。

(1) 視点

「心理学や社会学、社会科学等においても、科学者は、自分自身をも含めた世界の全体をもっぱら対象化し、その外に立ち、それを外から観察しよう」⁴とする。これに対し哲学は「生身の自分自身であらざるをえないわれわれ人間が、そうゆう人間のままいわば内側から世界を眺め、世界を捉えるという、そういうすぐれて内在的な営み」⁵である。

(2) 対象

① 自明な事柄

われわれが自明なこととしているため、あえて考えたりしない事柄が哲学の対象となる。この

² 例えば、山縣文治「社会福祉」山縣文治・柏女霊峰編『社会福祉用語辞典 第6版』ミネルヴァ書房、2007年、150ページ、北川清一「第2章 社会福祉に関する基本的理解」北川清一・遠藤興一編著『社会福祉の理解——社会福祉入門』ミネルヴァ書房、2008年、21ページ。

³ 納富信留「哲学の成立——古代ギリシアから現代日本に向けて」日本哲学会編『哲学』58、法政大学出版局、2007年、32頁。

⁴ 高山守「必然性・偶然性・そして、自由——『哲学とはいかなる営みか』に向けて」日本哲学会編『哲学』58、法政大学出版局、2007年、18頁。

⁵ 高山、同掲書、19頁。

点についてトマス・ネーゲルは「私たちはみんな、日々、非常に一般的な観念を用いているのですが、そうした観念について、とりたてて考えてみることはありません。ところが、哲学が主に関心を寄せているのは、この観念を問い直し、理解することなのです」⁶と述べている。

②存在するものすべて

「日本語の『科学』はその成り立ちからも『個別諸科学』の意味」⁷をもって、このことが示すように科学は、世界という全体の内部にある一領域（部分）を対象にしている。これに対して哲学は、世界という存在しているものごとのすべて、そして、それが存在しているということ、その存在の彼方、を思考の対象とする。

(3) 目的

①世界を学び直す

ヘルトは「哲学は古来より、先入観を排除することによって自らを単なる思いなしから区別しようとしてきた。それはプラトンが、真なる認識（エピステーメ）が思いなし（ドクサ）に取って代わるべきである、という主張をしたことに始まる」⁸と指摘する。ここで言われるプラトンの主張を示しているのが「洞窟の比喩」（プラトン『国家』第7巻 514-518E）である。納富はこの比喩について「知を愛し求める哲学とは、もとの束縛から私たちの魂を解放し、それを真の現実へと向けかえるところみである…（中略）…魂全体を日常囚われている世界から現実へと向けかえるところみ」⁹と述べている。

このような哲学の特徴を、現代において最も正当に継承しているのが現象学である。現象学では日常囚われている私たちの思い込み（ドクサ）に対して、現象学的還元操作を施すことにより、現実（事象そのもの）を理解しようとする。メルロ＝ポンティは現象学の立場から「真の哲学とは、世界を見ることを学び直すこと」¹⁰と述べている。このような目的が哲学にはある。

②垂直方向への知の進化

野家は哲学を科学と対比させた形で「科学が新たな『発見』を目指す未知の探求であり、水平方向に知を拡張する活動であるのに対し、哲学は自明性の『再発見』を目指す既知の探究であり、垂直方向に知を深化させる活動である」¹¹と述べている。これは、「世界を学び直す」という哲学の目的を別の仕方で表現したものであり、意味することは同じであろう。

(4) やり方

哲学には科学のように標準化された方法がある訳ではない。そもそも方法という概念自体が哲

⁶ N,Thomas, *What Does It All Mean? A Very Short Introduction to Philosophy*, Oxford University Press, 1987. (岡本裕一郎・若松良樹訳『哲学ってどんなこと？——とっても短い哲学入門』昭和堂, 1993年, 5頁).

⁷ 野家啓一『科学の哲学』放送大学教育振興会, 2004年, 12頁.

⁸ Held,K. *Husserls Phänomenologie, das Tor zur Philosophie des 20. Jahrhunderts*, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 1985/1986. (浜渦辰二訳『20世紀の扉を開いた哲学——フッサール現象学入門』九州大学出版会, 2000年, 11頁).

⁹ 納富信留『プラトン——哲学者とは何か』NHK出版, 2002年, 74頁.

¹⁰ Merleau-Ponty, M.*La Phénoménologie de la perception*, Gallimard,1945. (竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学1』みすず書房, 1967年, 24頁).

¹¹ 野家啓一「哲学とは何か——科学と哲学のあいだ」日本哲学史フォーラム編『日本の哲学』11, 昭和堂, 2010年, 10-11頁.

学にとってなければならぬものとはいえない。しかし、哲学にある「やり方」のようなものを見出すことは可能である。それをいく人かの哲学者の言葉から確認する。

まず、トマス・ネーゲルは哲学について、「哲学のネタは、世界から、そして世界と私たちの関係から直接生まれるのであって、過去の著作から生まれるものではありません…（中略）…哲学には形式的な証明方法がありません。問いを立て、議論し、考えを吟味し、それらに対して加えられるかもしれない反論を思い描き、私たちの概念は本当に有効なのかと考えてみること」¹²と述べている。次に、永井は「哲学とは、何よりもまずするものであって、学ぶのはその次でいいのだ」¹³といい、哲学のやり方について「大人になる前に抱き、大人になるにつれて忘れてしまいがちな疑問の数々を、つまり子どものときに抱く素朴な疑問の数々を、自分自身がほんとうに納得がいくまで、けっして手放さないこと」¹⁴と述べている。そして、野矢は大森荘蔵の哲学の特徴を「それは、『腑に落ちるようになるまでやる』ということである」¹⁵と述べている。

これらの言葉から、哲学のやり方について、1つの姿が見えてくる。それは、「哲学の問題は自分が生きている世界の中で生まれ、その中で、自分にとって切実な問題を腑に落ちるようになるまでやる」というものである。

Ⅲ. 福祉哲学の基盤

福祉と哲学の意味を確認した。次に、福祉哲学が成り立つための条件を、岩下壮一や小倉襄二ら福祉哲学の実践や思索を通して確認する。その上で、福祉哲学はどのような状況や経験のなかで生まれるのかを筆者の経験に基づき記述する。

1. 福祉哲学の成立条件

(1) 支援を必要としている人の前で／その人と共に

社会福祉という営みの外から、そこで問われている問いを考えることもできる。しかし、福祉哲学が成り立つために、支援を必要としている人の前で／その人と共に過ごす中で哲学をすることが必要であり重要である。このような立場において福祉哲学をしたのが岩下壮一である。岩下は「東大でケーベルに師事し、…（中略）…最優秀の成績で卒業し、将来、東大教授になることを期待されていた哲学者」¹⁶である。しかし、ヨーロッパ留学中にカトリック司祭となる。そして帰国後、日本で最初につくられたハンセン病患者のための施設である神山復生病院第6代院長となり、病院内で暮らす。

ハンセン病に対する薬や治療がなかった当時、病気が進行すると顔や手足に重い症状があらわれ、最後には気道にできた結節のため、七転八倒して苦しむことがある。苦しみが激しいと患者は岩下を呼び、岩下も何をおいても駆けつける。このような現実の中で岩下は「私は其の晩プラ

¹² 前掲書 6, 4-5 頁.

¹³ 永井均『〈子ども〉のための哲学』講談社、1996年、4頁.

¹⁴ 同掲書、13頁.

¹⁵ 野矢茂樹『再発見 日本の哲学 大森荘蔵——哲学の見本』講談社、2007年、153頁.

¹⁶ 阿部志郎『福祉の哲学』誠信書房、1997年、6頁.

トンも、アリストテレスも、カントもヘーゲルも、皆ストーブの中にたたきこんで焼いてしまいたかった。考えてみるがいい、原罪なくて癡病が説明できるのか。…（中略）…生きた哲学は現実を理解し得るものでなくてはならぬと哲人は云う。然らば凡てのイイズムは顕微鏡裡の一癩菌の前に悉く瓦解するのである。…（中略）…その無限小の裡に、一切の人間のプライドを打破して余りあるものが潜んでいるのだ¹⁷と哲学に対する苛立ちを覚え、その上で「しとしとと降る雨の音のたえまに、わたしはかれらの呻吟をさえ聞きとることができる。ここへきた最初の数年間は、『哲学することが何の役にたとう』と反復自問しないわけにはいかなかった。しかしいまやわたくしはこの呻吟こそは最も深い哲学を要求するさげびだということを知るにいたったのである¹⁸と書き記している。

ここに福祉哲学の姿を見出したのが阿部志郎である。阿部は『福祉の哲学』の中で「福祉の哲学は、机上の理屈や観念ではなく、ニードに直面する人の苦しみを共有し、悩みを分かちあいながら、その人びとのもつ『呻き』への応答として深い思索を生みだす努力であるところに特徴があるのではなかろうか¹⁹と述べている。

(2) 慣れ／思考停止からの離脱

しかしながら、支援を必要としている人の前で、あるいはその人と共にいる状況があっても、日々やらなければならないことに追われ、問い考えることをしなくなっているのが現場の現実である。この現実に対して小倉は書評のなかで、『福祉哲学の構想』の著者と同様の問いや問題意識をもつ者は少なからずいるだろうが、日々の業務に忙殺され、考えることをしなくなっている²⁰、と指摘している。

入所型の社会福祉施設に勤務した者は、最初はその集団的な生活に違和感をもつ者もいる。しかし、その生活のあり方に慣れ、このような生活は「仕方がないこと」として了解し、それ以上は「なぜ」と考えることをしなくなってしまう。このような慣れ／思考停止から離脱するところに福祉哲学は生まれる。

(3) 視るべきものを視る

「視るべきものを視る」とは同志社大学名誉教授小倉襄二の言葉である。「底辺にむかう志」に社会福祉の本質を見出す小倉にとって、社会福祉においては、まず「視るべきものを視る」ことが求められる。視るべきものの一端を小倉は、「人を人とも思わぬ状況²¹」や「無念をのみこむ無数の状況²²」と表現している。小倉は「人を人とも思わぬ状況」の一例を原田の経験に見る。それは次のような経験である。

¹⁷ 岩下壮一「御復活の祝日に際して」モニック・原山編著『キリストに倣いて——岩下壮一神父 永遠の面影』学苑社、1991年、206-207。

¹⁸ 岩下壮一「ジャック・マリテン著、岩下壮一訳『近代思想の先駆者』序文」モニック・原山編著『キリストに倣いて——岩下壮一神父 永遠の面影』学苑社、1991年、277頁。

¹⁹ 前掲書16、9頁。

²⁰ 小倉襄二「書評 中村剛著『福祉哲学の構想：福祉の思考空間を切り拓く』」日本社会福祉学会編『社会福祉学』51(1)、2010年、103頁。

²¹ 小倉襄二『福祉の深層——社会問題研究からのメッセージ』法律文化社、1996年、31頁、35頁。

²² 小倉襄二『社会状況としての福祉——発想を求めて』法律文化社、1981年、92頁、前掲書21、36頁。

「私にとって、水俣病をつうじてみた世界は、人間の社会のなかに巣くっている抜きさしならぬ亀裂、差別の構造であった。そして私自身、その人を人とも思わない状況の存在に慣れ、その差別の構造のなかで、みずからがどこに身を置いているのかもみえた。結論として、水俣病をおこした真の原因は、その人を人とも思わない状況（差別）であり、被害を拡大し、いまだにその救済を怠っているのも、人を人とも思わない人間差別にあることがみえてきた」²³

これは、社会福祉が視るべきものの一事例に過ぎない。しかし、これらをしっかりと視た上でなされるのが福祉哲学である。

2. 福祉哲学が求められる状況

(1) 偏差

人間は成長すると歩き、言葉を話し、ルールを理解することができる存在である、と私たちは思っている。しかし、社会福祉という営みの中では、歩くことができない人、言葉がなくルールを理解することができない人と出遭う。それだけではない。自らの便を壁に塗る（「便捏ね」といわれる）、蛍光灯を外し噛み砕いて食べようとする（異食）、縫合した糸をとってしまう、といった行動をする人もいる。これまで、自分もっていた人間理解とはかけ離れた姿と出遭う。そして、これまで自分もっていた人間理解が「当たり前」ではないことに気づく。このような偏差（ずれ）が「人間とは何か」「人間の尊厳とは何か」と問い考えることを促す。

(2) 既存の価値観や社会の在り方に対する疑問

私たちは、勉強にしてもスポーツにしても、また、仕事にしても「出来ないより出来た方が善い」と思っている。それは自明なことであり、それ故、能力を尺度として人間を捉えがちである。しかし、社会福祉は、能力が十分でないが故に働く機会がもてない人、日常生活が営めない人の支援をする。その中で強い違和感をもつのが、「出来る／出来ない」という事実認識の上に「出来る＝善い／出来ない＝悪い」という価値が重ねられている価値観／人間観であり、その価値観に基づく社会の在り方である。

人間が生まれもった能力には著しく違いがある。その違いは偶然もたらされたものであり、本人にはどうすることもできない。重い障害をもった人を支援する者の中には、そのような能力に基づく人間理解や、能力の違いが社会での暮らしに大きく影響を与える社会の在り方に、強い違和感を覚える者もいる。

(3) 意味を求める

病気になるいは事故により身体に重い障害を負い、これまで出来ていたことが出来なくなることがある。介護が必要な状態になり、家族に対して日々申し訳ないと思うと同時に、自分が社会の中に生きている意味は何なんだろう、と思う。社会福祉にはこのような状況もある。

²³ 原田正純『水俣が映す世界』日本評論社、1989年、3-4頁。

(4) 実践の拠り所を求める

50年に亘り地域福祉の第一線で活躍した阿部は「福祉の世界に入ると、自分自身のよって立つよりどころを求めずにはいられない厳しさに直面させられる」²⁴という。社会福祉の実践では次のような経験をすることがある。

「児童虐待が疑われる家庭を訪問して、そこで児童と会った。児童は『アンパンマン、アンパンマン』といていた。私は、この子はアンパンマンが好きなんだな、と思った。翌日、その子が虐待により亡くなった連絡を受けた。後で分かったことであるが、その子にとってアンパンマンは助けてくれる存在なのである。すなわち、あの時あの子がいていた『アンパンマン、アンパンマン』という言葉は、『僕を助けて、僕を助けて』というメッセージだったのである。それを知った時、あの子が亡くなってしまったという深い悲しみとともに、助けてあげられなかった無力感とメッセージに気づいてやれなかった申し訳なさに苛まれた」²⁵

社会福祉の実践では、自分自身の拠り所を求めずにはいられない厳しさに直面させられる時がある。

(5) 原理や本質を求める

憲法第25条に掲げられている生存権を保障するために法制度に基づく社会福祉がつくられ、そのもとで社会福祉の支援が行われている。それ故、社会福祉の領域では、他者を支援することは人権を保障することである、と理解されている。しかし、生存権を保障するための仕組みである社会福祉という制度の中で支援していた筆者は、他者を支援するということは、上手く言葉では言い表せないが、人権保障という理念以前のもっと原初的なもの、もっと根源的なもののように感じていた。このように感じ、それを何とか言葉にしたいと思っているのは筆者だけではないであろう。

また、生活保護の申請に来たのに、十分に話すら聴かず追い返す福祉事務所の窓口の対応や障害をもった人に応益負担を強いる障害者自立支援法などを前にすると、「そもそも社会福祉とは何なんだ、その本質は何なんだ」と問い、明らかにしなければと強く思う。

IV. 福祉哲学の概略

ここでは、岩下壮一、阿部志郎、小倉襄二、嶋田啓一郎、秋山智久ら福祉哲学の実践者から学びつつも、自ら社会福祉という営みのなかで哲学した結果思い描くようになった福祉哲学の概略を、視点、問い、目的、方法／やり方といった観点から整理し、その上で、福祉哲学の暫定的な定義を行う。

²⁴ 前掲書 16, 19頁。

²⁵ この体験は、社会福祉士である中川み氏が2008年11月19日に、関西福祉大学における学術講演会「現代社会の要請に応える更生保護と環境社会学」において言及されたものである。

1. 視点

福祉哲学は様々な立場からなされる。支援を必要としている当事者が哲学をする、支援者が哲学をする、あるいは、その双方ではない立場の者が哲学をするなど、様々である。ここでは、当事者の視点と支援者の視点を採り上げる。

(1) 当事者の視点

例えば、進行性筋ジストロフィーのため、物心ついた時から歩行が不安定で12歳で車イスになった。20歳代で死を迎えるといわれている。なぜ、自分がこの病気にならなければならなかったのだろう。例えば、義理の母を介護し始め2年がたつ。最近では認知症の症状が進み徘徊もみられ目が離せない。この半年は自分も腰を痛め介護が辛い。この状態がいつまで続くのだろう。

このような当事者の視点があり、それは今まさにその状況を生きている人の視点である。世間では介護の問題を「他人事ではなく我が事と捉える必要がある」という。しかし、当事者になってみなければ分からない気持ちや状況がある。そして、その視点からなされる福祉哲学がある。

(2) 支援者の視点

社会福祉ではしばしば、「その人の立場になって考える」といわれる。社会福祉における支援をする上での基本的スタンスである。しかし同時に、決してその人の立場や状況に立つことはできないことも自覚している。この自覚の上でなされる福祉哲学がある。

2. 問い

永井は「哲学は主張ではない。それは、徹頭徹尾、問いであり、問いの空間の設定であり、その空間をめぐる探究である」²⁶という。社会福祉では、「福祉哲学が求められる状況」の中で様々な問いが発せられる。その問いは、大別すると社会福祉の問いと社会福祉学の問いとに区分される。ここでは前者の問いを1点だけ採り上げ、後者の問いはV章で示す。

「なぜ、私が／なぜ、この人が」という問い

まじめに一生懸命働いてきた。なのに、なぜ自分がリストラされなければならないのか。なぜ、この子が小児がんにならなければならないのか。神谷美恵子はハンセン病を患った人と出遭い「なぜ私たちでなくあなたが？ あなたは代って下さったのだ 代って人としてあらゆるものを奪われ 地獄の責苦を悩みぬいて下さったのだ」²⁷と詠んだ。

これらの問いに対して、それは会社の業績が悪化したから、らい菌に感染したから、などの原因で答えることはできる。しかし、ここで発せられている問いは、そのような経験的な水準で問われているのではない。誰かがリストラされる。誰かが治療困難な病気や重い障害をもって生まれてくる。「誰かが」であるがゆえに、他の人でもよかったはずである。にもかかわらず、なぜこの私が、あるいはなぜこの人が、といったことが問われているのである。これらの問いを生み出す原因や答えは、経験的な水準を超えているという意味で形而上学的な問いである。社会福祉という営みの中ではこのような形而上学的な問いが、切実な問いとして発せられている。

²⁶ 永井均『これがニーチェだ』講談社、1998年、10頁。

²⁷ 神谷美恵子『人間をみつめて 神谷美恵子コレクション』みすず書房、2004年、139頁。

3. 目的

(1) 社会福祉における体験を学び直す

糸賀一雄は近江学園という日本で最初の複合児童施設（養護児と知的障がい児）を創設し、社会福祉における古典とされている『福祉の思想』を記した人物である。糸賀の時代、ほとんどの人が知的障害児・者に対して、可哀そうという同情・憐れみの気持ちをもっていた。これが、その時代の障害児・者に対する人びとの体験である。しかし糸賀は、知的障害児・者に対する実践を通して、そのような体験を学び直し次のように語った。

「くどいようだが、この子らが不幸なものとして世の片隅、山峡の谷間に日の目もみずに放置されてきたことを訴えるばかりではいけない。この子らはどんなに重い障害をもっている、だれととりかえることもできない個性的な自己実現をしているものなのである。…（略）…『この子らに世の光を』あててやろうというあわれみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよみがきをかけて輝かそうというのである。『この子らを世の光に』である」²⁸

「この子らに世の光を」ではなく「この子らを世の光に」という社会福祉における体験の学び直し。これが福祉哲学の目的であり、糸賀に福祉哲学の典型的な例を見ることができる。

(2) 社会福祉において大切なこと（問いと価値）に気づく

糸賀は、「この子らに世の光を」ではなく「この子らを世の光に」という社会福祉における体験の学び直しを通して、知的障害児・者一人ひとりが、誰と取り替えることができないかけがえない存在であり、その人自身が光を放っていることに気づいた。

また、嶋田啓一郎や秋山智久は「～ができること」（能力）が支配的な価値観となっている資本主義経済体制下においては“無用な人間”と見なされる人びとが存在し、そこには“必要とされていない人間の苦しみ”があることに気づいた。それが故に、パウル・ティリイヒの言う「the feeling of being necessary（自分の存在が必要とされている感覚）」が社会福祉実践においては最も大切であると指摘してきた²⁹。

社会福祉における体験の学び直しは、このような大切なことに気づかせてくれる。

(3) 新たな解決策に思考を開く

応用哲学といわれる営みがあり、その可能性として「哲学者による『前提の見直し』作業が、これまでの解決策を制約していた『枠組み』の存在に人々の目を向け、結果として、その枠組みの下での解決策が『唯一の正解』ではないことを人々に気づかせ、さらに、それが、その枠組み

²⁸ 糸賀一雄『福祉の思想』日本放送出版協会、1968年、177頁。

²⁹ 嶋田啓一郎『社会福祉体系論——力動的統合理論への途——』ミネルヴァ書房、1980年、331頁、秋山智久「第2章 人間の幸福と不幸——社会福祉の視点より——」嶋田啓一郎監修、秋山智久・高田真治編著『社会福祉の思想と人間観』ミネルヴァ書房、1999年、40頁。

を超えた新たな解決策の模索と発見へとつながっていく³⁰といった内容が提示されている。

社会福祉は問題の改善・解決を目指す。そこにおいては、問題の改善・解決という条件が自由な思考を制約し、その結果、対処すべき問題に対して狭い見方しかできなくなっている可能性がある。そのようななか福祉哲学は、直面している問題に対して、これまでとは違った見方に思考を開き、結果、新たな解決策への模索と発見を可能にする。

4. 方法／やり方

(1) 社会福祉という事象に向き合い考える

福祉哲学は、哲学者、あるいは小倉襄二、阿部志郎、糸賀一雄らの文献を研究することではない。福祉哲学は哲学者や先に挙げた人びとから学びつつも、自ら社会福祉という事象に向き合い「する」ものである。社会福祉という営みの中で、あるいは、社会福祉という営みに対して、自分にとって切実な問題を胸に落ちるようになるまで考えるのが福祉哲学のやり方である。そこには科学のような標準化された方法がある訳ではない。しかし、敢えて言えば、社会福祉という営みにおいて、人びとが呼びかけている、あるいはその状況が投げかけている問いを聴き、その応答としてなされるのが福祉哲学である。

(2) 哲学を参考にする

社会福祉という営みの中で、切実な問題を感じ、様々に問い考えても、限られた知識や思考ではどうにもならないことが多い。自らの体験をどのように考えればいいのか、その体験を学び直すために活用できる哲学（古代ギリシア哲学や現象学など）があれば、福祉哲学は必要に応じそれらを活用しながら行う。

(3) 問いを顕在化させる話し合いの場を設ける

社会福祉の現場は様々な課題の解決や業務に追われている。そこでは、問いを聴く場面を経験しても、それについて考える余裕がない。また、そこで感じる（聴く）問いは、人間とは何か、福祉とは何か、といった根源的な問いであるが故に、どのように考えればいいのか分からず、結局、考えることを諦めてしまう人がほとんどである。この点は支援者に限らず、支援を必要としている当事者においても同じであろう。それ故、社会福祉という営みの中で、哲学的な問いは潜在化してしまう。

必要なことは考え話し合う場を設けることである。これまでの社会福祉では、ケース会議や政策立案に関する会議など、直接問題の改善・解決を図るための話し合いのみが設けられてきた。しかし、社会福祉の現場は直接問題の改善・解決を図るためではなく、「もっと根源的なことを考えたいんだ」という気持ちが潜在化している。その気持ちに応え、問いを抱いている一人ひとりが自らの体験を学び直すために、また、新たな解決策に思考を開くきっかけを提供するためにも、哲学カフェのような哲学的対話の実践を福祉の現場でも展開していく必要がある。

³⁰ 戸田山和久・出口康夫「総説——応用哲学とは何か」戸田山和久・出口康夫編『応用哲学を学ぶ人のために』世界思想社、2011年、v頁。

5. 暫定的定義

福祉哲学を定義するという事は、福祉哲学とそうでないものとの間に境界線を設けることである。結果、福祉哲学であるかもしれない営みを排除してしまう可能性がある。それゆえ、定義することは大変に困難な作業である。しかしながら、福祉哲学に対する規定を全くしなければ、福祉哲学に対するイメージすら抱くことができず、結果、福祉哲学に関心を寄せる少数の人たちへ閉じた営みになってしまう。そうならないために、福祉哲学を探究していくための作業仮説として、暫定的な定義が必要であると考えられる。

このような考えに基づき、これまでの考察をまとめる形で福祉哲学を暫定的ながら定義すると「福祉哲学とは、見るべきものを視てそこに身をおき、そこで聴かれる呻きへの応答として哲学をすることで、社会福祉における体験を学び直すこと、そしてそのことにより、社会福祉において大切なことへの気づきをもたらす探究の営みである」となる。

V. 福祉哲学と社会福祉学

社会福祉学は、単に事実に基づき構築されるものではない。社会福祉学を構築するためには、社会福祉という営みの中で発せられる福祉哲学の問いについて考えることを通して、体験される様々な思い込みや偏見、誤った理解を学び直し、社会福祉という現実をしっかりと理解する必要がある。そして、そこで理解された大切なことを基盤に構築していく必要がある。すなわち、社会福祉学の構築には福祉哲学が必要なのである。

さらに、社会福祉学を確固とした学問として成立させるためには、①社会福祉学における認識はどのような仕組みによってもたらされるのか、②社会福祉学の正当化はどのようにすればなされるのか、という点についての考察も不可欠である。そして、これら①、②の問いも福祉哲学の問いである。このように、いまだ確立されていない社会福祉学を構築するためには福祉哲学が不可欠である。

VI. おわりに

本稿では福祉哲学を対象としてその概略を示した。しかしながら、本稿では直接、社会福祉という営みの中で、あるいは、社会福祉という営みに対して哲学した訳ではない。今後は福祉哲学の実践を通して、福祉哲学のあり方を具体的に示していきたい。そして、福祉哲学を方法として用いることで「超越論的次元を踏まえた社会福祉学の構想」が可能となることを示していきたい。

(なかむらたけし 臨床哲学・博士後期課程)

What is welfare philosophy?

— An introduction to “the concept of social welfare study based on transcendental dimensions” —

Takeshi NAKAMURA

To sustain and develop social welfare on the basis of social welfare study necessitates a welfare philosophy that engages and persists in asking the question “What is social welfare?” in a fundamental manner. Given such a problem consciousness, this paper is intended to define welfare philosophy with utmost clarity.

As described in this paper, we regard welfare philosophy as “philosophy that is performed in or for the practice of social welfare.” To elucidate the content of welfare philosophy in this sense, first we review the meanings of welfare and philosophy. We then verify the conditions necessary to establish welfare philosophy through the thoughts of welfare philosophy practitioners such as Soichi IWASHITA and Joji OGURA. Subsequently, welfare philosophy is explained based on the author’s own experience, in which situational or experiential welfare philosophy emerges. On that basis, the epitome of welfare philosophy that came to be envisaged, resulting from performing philosophy in one’s own practice of social welfare, along with learning from welfare philosophy practitioners such as Soichi IWASHITA, Shiro ABE, Joji OGURA, Kazuo ITOGA, Keiichiro SHIMADA, and Motohisa AKIYAMA, is assembled and presented from points of view, questions, purposes, and methods as well as approaches.

Based on the considerations presented above, we offer the following as a tentative definition of welfare philosophy: “Welfare philosophy means to view what should be viewed and to put oneself there, and to perform philosophy as a response to the pleas heard there. It is the ultimate practice to bring about awareness of what is important in social welfare by relearning experiences in social welfare.”

〔キーワード〕

福祉哲学、視るべきものを視る、呻きへの応答、体験の学び直し、大切なものへの気づき